

令和元年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

ドイツにおけるまちの活気創出
～歴史的資源や文化活動による地域振興～

調査地：ドイツ連邦共和国

調査日：令和元年１０月１４日～２１日

一般財団法人地域活性化センター

総務企画部 企画グループ 名越 隆昭

報告書概要

総務企画部 企画グループ 名越 隆昭

調査テーマ

「ドイツにおけるまちの活気創出～歴史的資源や文化活動による地域振興～」

調査の目的

私の派遣元である古河市は、多くの文化財や史跡を有し、室町時代や江戸時代の趣や風情を残す街並みが広がっている。一方、市民が地元の歴史や文化に触れる機会が減っており、人口流出やまちの活気の喪失に繋がっている。こうした現状を改善するため、地域の歴史や文化を大切に保存・活用するドイツにおける取組を調査した。

調査結果

- ・バイエルン文化遺産協会は、歴史的価値の高い地域資源を積極的に保存・活用している。また、郷土の歴史や文化財を守りたいと活動する人たち同士のつなぎ役にもなっている。
- ・エアランゲン市では、市内各地域の小規模なコミュニティでの文化活動が盛んである。また、市街地では景観への配慮や街並みの雰囲気づくりを大切にしており、市民が歴史的建造物等の良さを感じながら「滞在したくなるような」まちづくりを行っている。
- ・フランクフルト市では、地域の歴史や文化に関する書籍を配架した公共本棚が、人々の交流や街の賑わいを生んでいる。また、日本映画祭の開催を通して市民が日本文化を知るとともに、それが自国の文化の良さを再認識し、より大切にするきっかけにもなっている。

提案

①文化遺産協会の設立と地域資源の積極的な活用

文化遺産協会を設立して地域資源の歴史的な価値や魅力を再発見し、古民家でのお茶会や武家屋敷での能楽など文化的な体験ができる施設を設けて歴史文化の発信拠点とする。

②居心地の良い場所づくりと街歩きマップの作成

施設の案内版やベンチに古き良き街並みの景観や雰囲気に溶け込むような色・デザインを用いて、まちの景観に一体感を持たせる。また、小学生に寺社や史跡を訪ねる街歩きをしてもらい、そこで得られたエピソードを収集・反映した街歩きマップを作成する。

③公共本棚の設置とドイツ・コネクションの開催

公共本棚を設置して地域の歴史や文化に関する知識を市民の間で共有するとともに、市民の交流や市民活動の展開を促す。また「ドイツ・コネクション」を開催して異文化交流を深めるとともに、市民が郷土の歴史文化を再認識することに繋げる。

目次

1. はじめに	P 1
2. 調査の背景	P 1
(1) 日本の人口の現状	
(2) 古河市の現状と課題	
3. 調査地の選定	P 3
4. 調査内容	P 4
(1) バイエルン文化遺産協会	
(2) エアランゲン市	
(3) フランクフルト市	
5. まとめ	P 10
6. おわりに	P 12

1 はじめに

本稿は、地域活性化の手段として地域資源を活用したまちづくり、とりわけ、歴史的資源の保存・活用や住民の文化活動が盛んに展開されている海外の事例を調査し、その取組とまちの賑わい創出との関係及び課題を抽出することで、派遣元を含む地方自治体の施策の一助とすることを目的とする。

2 調査の背景

(1) 日本の人口の現状

総務省統計局によると、日本の総人口は2019年9月1日現在1億2,613万人であり、2008年の1億2,808万人をピークに減少傾向にある。2019年の合計特殊出生率は前年比0.01ポイント減の1.42、65歳以上の人口は3,558万人で高齢化率は28.1%となるなど、少子高齢化の傾向が年々強まっている。

また、昨今はそうした中で東京一極集中の流れが続いている。総務省の住民基本台帳人口移動報告によると、東京圏では2019年まで24年連続の転入超過となっている。2019年の東京圏への転入者は約49万7千人で、転出者を14万5千人上回っており、このうち13万人あまりは15歳～29歳の若年層が占めている。人口減少が進む中で若者を中心に地方から人口が流出していることから、多くの地方は活気を失いつつある。

このため、国は様々な地域活性化の施策を展開している。その一つとして、観光庁は2016年3月「明日の日本を支える観光ビジョン」を策定し、地域に眠る歴史的資源を観光資源として再生・活用する「観光まちづくり」を推進している。また、文化庁は、文化財の総合的な保存・活用をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりでその継承に取り組むべく、2018年6月に文化財保護法を改正して、地域の文化財を積極的に活用した振興策を後押ししている。

(2) 古河市の現状と課題

古河市は、茨城県最西端、関東平野のほぼ中央に位置する人口約14万人の都市である。栃木県・埼玉県との県境にあり、群馬県・千葉県にも近い。市内にはJR宇都宮線や国道4号線等が走っており、東京から概ね1時間圏内にある。2015年には首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の境古河インターチェンジの供用が開始され、利便性が向上した。



▲古河市の位置図

歴史的には、古河市は、室町幕府と対立していた鎌倉公方足利成氏が鎌倉から逃れて古河に移り住み古河公方と称したことがきっかけで、以後約 130 年間にわたり関東の政治の中心として栄えた。江戸時代には、当時の主要な街道であった日光街道が通る古河藩の城下町として賑わった。このため、市内には国・県の文化財を含む多くの寺社や史跡があり、JR 古河駅のほど近くには武家屋敷の名残を留めた建造物が集積し、風情ある街並みが広がっている。

さらに、古河市は第二次総合計画において「豊かな市民文化の創造のための歴史文化と芸術の振興」を掲げ、市民文化活動及び芸術文化活動を促進するとしており、市民の文化芸術活動を市街地における賑わい創出の手段の一つと捉えている。

市内には、国指定重要文化財 2 件、県指定文化財 16 件、市指定文化財 130 件があり、市は歴史博物館や文学館でこれら貴重な文化財を公開している。また、歴史的文化的に貴重な未指定の文化財も市内に数多く残っており、文化財に触れる機会に恵まれている。しかし、2018 年度の歴史博物館の入館者数は、空調工事のため 3 カ月間休館した 2010 年度及び 2015 年度を除き、1990 年の開館以来最少となる 1 万 5 千人で、最も多かった 1991 年度の半数以下に落ち込んだ。文学館も 1998 年の開館以来最少となる 1 万 1 千人に留まり、最も多かった 1999 年度の約 2 万人から 9 千人も減少した。

歴史博物館	年度	1990 (開館年度)	1991						
	入館者数	21,581	31,705	2013	2014	2015	2016	2017	2018
				16,611	22,150	13,925	20,787	19,511	15,044
文学館	年度	1998 (開館年度)	1999						
	入館者数	12,234	20,892	2013	2014	2015	2016	2017	2018
				12,735	13,245	12,262	12,498	15,387	11,404

▲歴史博物館、文学館の入館者数の推移（両館の集計データを基に筆者作成）

また、市民の文化的生活の向上を目的に、文化芸術に関する活動や情報発信を行っている古河市文化協会は、市内各地区で市民文化祭を開催し、市民から募集した書や絵画作品を展示するとともに伝統芸能や歌、ダンスなどのイベントを行うなど、芸術文化の発表の機会を設けている。しかし、2013 年度に 95 団体・約 3,200 人であった同協会の会員は、2019 年 5 月には 88 団体・約 3,000 人に減っており、各加盟団体においても後継者の育成・確保が課題となっている。



▲古河歴史博物館



▲趣のある建造物

上述のように、古河市には歴史的資源が豊富にあり、多様な文化活動の素地があるにも拘らず、現状まちの賑わい創出に十分に結びついていない。市民が歴史文化に触れる機会を増やし、興味・関心を高めていくことにより、地域に対する愛着の醸成を図ることも魅力あるまちづくりを進めるうえで欠かせない。そのためには、地域の文化財や史跡などの保全や活用を強化するとともに、これまで地域の歴史や文化にさほど興味がなかった市民を巻き込むために、市民による文化活動の場をさらに広げていくことが必要である。

3 調査地の選定

文化の定義については、1982 年にメキシコシティで行われたユネスコの文化政策に関する世界大会で国際的に確立されており、「社会あるいは社会集団の精神的・物質的・知的・感情的特性の組み合わせであり、芸術・文学に加えて生活様式・共生の仕方・価値体系・伝統・信念を含む」とされる。

地域資源を活用した様々な活動が世界中で行われているが、中でもドイツでは、各地域で密度の濃い多様性のある文化活動が展開されている。今日のドイツ全土で見られる劇場や博物館の多くは、中世以来の自由都市や封建領主の小国において、君主や市民によって創設され発展してきたものである。これらは現在に至るまで文化活動の拠点として、住民の郷土愛・地域愛や歴史を大切にする心を育む役割を担ってきたことから、ドイツ人のアイデンティティの根幹を成すものと考えられる。各州政府も、文化政策に関する基本方針や大綱を定めたうえで自治体の裁量を広く認め、住民の自主的・自発的な文化活動を尊重している。

バイエルン文化遺産協会は、建造物や遺構など多くの歴史的資源が残るバイエルン州で活動する団体である。バルン・シブラル国务大臣がその活動に強い理解を示す通り、地域資源の重要性に着目し、その保存・活用に力を入れる団体であることから、古河市が地域資源を活用した施策を展開する上でも参考になると考え、視察先に選定した。

エアランゲン市は、人口規模が古河市に近い地方都市であり、自主・自発的な市民活動

が活発である。自分たちのまち・文化をつくろうという意欲が強い、成熟都市であることから、活発な市民活動をまちの活性化に結びつけていく面で参考になると考え、視察先に選定した。

また、フランクフルト市は、人・物・情報が集積する交通の要衝として発展してきた大都市で、多様な文化や様々な市民活動に寛容なまちとして知られる。多様な文化が育まれる中で、小さな取組が大きな行事に発展した事例があることから、古河市におけるまちの賑わい創出の参考になると考え、視察先に選定した。

以上、ドイツにおいて、歴史的文化的資源や住民の文化活動が地域振興に寄与する事例やまちに人を呼び込むための取組などを取材することで、古河市の取組に参考になると考え、調査を行うこととした。

4 調査内容

(1) バイエルン文化遺産協会

①概要

バイエルン文化遺産協会（以下「協会」という。）は、もともとフェライン¹として地域にある歴史的価値の高い建造物や文化財の保護を行っていたが、2015年にバイエルン州全体を活動範囲とする協会となった。協会の設立に当たっては当初から国やバイエルン州に関わり、州内にある歴史的文化的資源の保全を通じた地域活性化に取り組んでいる。現在約900人の会員を擁し、その他に約200人のボランティアが在籍する。州内に多くある唯一無二の文化財や遺構を後世に遺していくため、行政だけでは対応できないとりわけ住民レベルでの小規模な活動をサポートの対象としており、郷土の歴史や文化財を守るために活動する人たちをつなぐ役割も担う。



▲バイエルン文化遺産協会のロゴマーク



▲Schlumberger-Steger 氏(左から2番目)

¹ フェライン：協会、同好会、NPOなどを意味する市民団体で、共通の趣味を持った人々の集合体から本格的なボランティア活動を行うグループなど、活動頻度やメンバー同士のつながりの強さは様々である。結成目的も文化・芸術・スポーツ・地域福祉など多岐にわたり、その数はドイツ全土で50万団体以上あるとされている。

②協会の方針

協会の広報担当者である Judith Schlumberger-Steger 氏に話を伺った。協会は、イギリスにおけるナショナルトラスト²の「その土地にある文化を守る」という考え方をモデルに「ともに価値を持続させよう～行動力と情熱をもって～」をスローガンとし、州内の歴史的文化的資源を保全するだけでなく積極的に活用することを活動方針としている。積極的な活動を展開するに当たり、2019 年には、200 人のボランティアの居住地や活動可能時間、希望する活動内容、居住地から文化財や遺構までの距離などをデータベース化し、必要な時に必要な人員を確保し活動するための体制を整えた。

③主な取組

協会は、州内にある歴史的建造物や文化財のうち、優先的に保護すべきもの 10 件をリストアップした。選定に当たっては、①つくられた時期、②希少性、③歴史的意義、④持続的可能性、などを評価の基準とした。

協会は、リストのうち、最初にバイエルン州北西部のローテンブルクに現存する「ジュデンガッセ 10」という中世後期の家屋の保存に取り組むこととした。これは 1409 年頃に建てられた住宅で、地下室にはユダヤ人の儀式浴場「ミクヴェ」がある。また、上層階の板張りの部屋も建築当時のものであることが分かった。700 年以上経った住宅が 15 世紀唯一のミクヴェとともにそのままの形で残っていることが非常に貴重で歴史的価値が高いことから、考古学者やローテンブルク文化遺産協会をはじめ多くの個人・団体の無償協力を得て修繕・保護活動を始めている。

今後、協会はこの家屋を博物館として活用することを検討しており、維持費は入館料で賄う方針である。Schlumberger-Steger 氏は「より多くの人に訪れてもらい、この家を通して古いものを遺すことの意義や地域の歴史を知ってほしい」と話してくれた。



▲ローテンブルクにある「ジュデンガッセ 10」での保存活動の様子

(2) エアランゲン市

①概要

エアランゲン市は、ドイツ南部バイエルン州にある人口約 11 万人の都市で、州都ミュン

² ナショナルトラスト：歴史的建築物の保護を目的として英国で設立されたボランティア団体。単なる環境保護ではなく、歴史的建造物や景勝地を国民の遺産として保持することで、愛国心や国民の一体感といったナショナル・アイデンティティを形成・強化することを意義としている。

ヘン市の北およそ 200km に位置する。市内には、医療機器メーカーとしても世界的に有名なシーメンス社をはじめ、医療やエネルギー分野の企業の研究開発拠点が集積している。また、大学の町としても知られており、バイエルン州で 2 番目に大きなフリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン（通称「エアランゲン大学」）のキャンパスがある。

同市は、17 世紀にフランスから宗教弾圧を受けていたプロテスタント派の一派「ユグノー」を受け入れ、当時最先端の手工業の技術を持つ彼らの存在がまちの経済発展に繋がったという歴史的経緯から、移民受入に対して理解がある。現在、市民の約 15% が外国人であり、帰化した人を含めると外国にルーツがある市民は約 25% に上る。このため、異文化に寛容で多様性に富み、新たな価値観が入り込み融合しやすい土地柄であるという。



▲シーメンス社



▲エアランゲン大学

②エアランゲン市の方針

エアランゲン市街修繕課の Josef Weber 氏、都市計画課の Tilmann Lohse 氏及び文化促進課の Veronika Schöls 氏に話を伺った。市は、文化・価値観・アイデンティティの 3 つをコンセプトに、経済・社会・環境のバランスを大切にしたまちづくりを行っている。また「オンラインから対面へ」をスローガンに、市民が街歩きや滞在をしたくなるような「居心地の良い場所づくり」を重視している。

③主な取組

i) 中心市街地への誘客

第二次世界大戦後、市では経済発展に伴い自動車が普及する一方、市の中心部は駐車場の拡大と歩行者の減少により閑散としていた。このため、市は、人通りを取り戻し活気のある中心市街地の再生を目指して、道路のあり方を



▲エアランゲン市の都市戦略図

(出典：エアランゲン市ホームページ)

「移動するため」から「滞在するため」へと改め、まちづくりのコンセプトに位置付ける「文化」の薫る市街地をつくることとした。

具体的には、宮殿広場を中心とするメインストリートへの自動車の乗入を禁止する一方で、石畳を敷き、街路樹を植えるなど、風情ある落ち着いた雰囲気づくりに努めた。中でも興味深いのは、市が広場への出店者に対して、テントの色・デザインを市が定めたものにするよう求めていることである。これにより広場の景観に統一感が生まれ、歩行者にとって広場一帯に集積する伝統的な建物の歴史的な趣や雰囲気が感じられる視覚的効果があるという。

また、市は空き店舗や広場を活用して、人々がまちに滞在したくなるような仕掛けを生み出すことが重要と考えた。具体的には、アーティストと連携して、駆け出しの芸術家やバンドグループなどが活動できる機会を増やしながらか賑わいをつくり出すイベントを企画・実施している。



▲宮殿広場周辺の市場。各店舗とも赤と白の縞模様のテントを使用している

イベントの実施に当たっては、商店主や近隣住民と継続的に議論する場を持った。その結果、市全体で文化活動を盛り上げていくことが、市街地活性化の一つの大きな手段であるという共通認識が生まれ、次第に商店主からもアイデアが出されるようになった。店内にカフェスペースを設けたり、駆け出しの芸術家が描いた絵やデザインをあしらった椅子を店舗の入り口に設ける店主が現れたことにより、店舗そのものが往来する人の目に留まり店主と客の会話が増えたり、外出をためらっていた高齢者が家を出て商店主や客と触れ合う姿が増えているという。

市では「食」に関するイベントに芸術や音楽のプログラムを組み込むことにより、食以外に関心がある人々との相乗効果でイベントを盛り上げるとともに、少しでも市民がアーティストの文化活動に触れる機会を提供している。また、広場への出店者や店舗経営者向けに、客の呼び込み方法や人々が来店したくなるような店の雰囲気作り等を学ぶセミナーを実施するなど、対面の小売店だからこそ出せる魅力ある店舗づくりをサポートしている。

ii) 地域愛を育む市民の文化活動

様々なルーツを持つエアランゲン市民は、地域社会の中に自分たちの居場所を作り集う傾向が強い。そのため、文化活動に関するフェラインが多く存在し、地域の文化として確立している。市は、市民による主体的な文化活動をサポートすべく、地区単位や自治会、公民館単位など比較的小規模な活動をしているフェラインと協働し、活動全般に関する相談や活動場所の提供等を行っている。

市内のある地域では、子どもたち(26歳まで)だけで構成されるユースクラブというフェラインが、ライブ等のイベントを自ら企画・開催し、賑わいづくりにも一役買っている。大人は活動内容に介入しないことが徹底されており、市も、彼らの活動内容には原則口を出さない。金銭面以外のことは全て自分たちだけで作り上げていくため、子どもたちがしたいことを自由に表現できる機会となっており、自己実現による満足感や達成感が得られると同時に、自分たちがまちを盛り上げているという自負が、地域愛を醸成している。

また、別の地区では「遊び場オフィス」という活動が展開されている。これは、子どもたちが地域に飛び出し、公園の場所や遊具の種類・数、子どもたちの間で流行っている遊びなどの情報を集めて、それらを反映した街歩きマップを作成するというものである。子どもたちにとってはまちを知る機会となり、市にとっても、子どもたちから相談や意見を受ける中で、子どもたちがまちをどのように見ているかが分かる。さらに、マップ作成時に子どもたちが気付いた施設の老朽化情報等の提供を受けることになり、公共施設の早急な修繕にも繋がっている。

一方で、課題もあるという。ドイツでは大抵のまちに劇場があり、多くの住民がオペラや演劇を楽しむことから、劇場が地域住民のコミュニティになっている。しかし、より良質のものを求めて、劇場の規模や数、講演内容が充実する大都市に人々が移り住む傾向があるという。そのため、市では、エアランゲンでしか見られない文化コンテンツを提供していくことが必要と考えている。実際、コミックフェスティバルや人形劇、シアターパフォーマンスをはじめ、特徴的な市民活動を求めて地域に積極的に顔を出し、活動に寄り添いながら人々が集まるようなイベントへの出演を持ちかけている。Schöls氏は「これからも市民活動が地域特有の文化になっていくため、どういう形でサポートしていくことができるか、より良い方策を考えていきたい。意欲的な郊外の地域住民のために、中心市街地の空き店舗を活動場所として提供することも一つの方法だ」と述べている。

(3) フランクフルト市

①概要

フランクフルト市は、ドイツ中西部ヘッセン州に属し人口約75万人で、ベルリン、ハンブルク、ミュンヘン、ケルンに次ぐドイツ第5の都市である。ヨーロッパのほぼ中央に位置し、世界最大級のハブ空港やヨーロッパ最大のターミナル駅を擁する交通の要衝である。また、ヨーロッパ中央銀行の本社が置かれるなど国際的な金融都市としてドイツ経済の中核を担っている。

同市は、中世以来ドイツの中心都市の一つであったことから、歴史を重ねる中で芸術をはじめ様々な文化が発展してきた。旧市街にはレーマー広場をはじめ中世の景色を色濃く残す街並みが広がる一方、市の中心部には近代的な高層ビル群が立ち並ぶなど、歴史と現

代が融合する豊かなまちである。



▲フランクフルトの高層ビル群



▲旧市街の中心にあるレーマー広場

②フランクフルト市の方針

フランクフルト市文化促進課の Johannes Promnitz 氏及び Martina Teipel 氏に話を伺った。同課では「文化活動は人生を充実させ、楽しく生活するために必要なもの」との考えのもと、市民活動を最大限尊重するとともに、いかに住民の自発的な活動を引き出せるかという点を重視している。具体的には、駐車場や公園、イベントスペースなど公共の場を文化活動の機会として提供することを通じて、活動の場を欲する市民や芸術家の行動を促すことや、より多くの人々が歴史や文化への関心を深めていくことを狙っている。



▲街角に設置された公共本棚

③主な取組

i) オープンブック（公共本棚）

オープンブックは、道路や街角、バスの停留所などの公共スペースに本棚を設置し、行き交う人々が自由に本を手にとることができるという取組である。フランクフルト市では2009年11月から設置を始め、現在市内におよそ40の公共本棚がある。本はいつでも誰でも自由に読むことができ、別の本棚へ返却しても良い。気に入った本は持ち帰っても良く、不要になった本を寄付する人もいる。

この取組は、経済協力開発機構（OECD）が2000年に加盟国の15歳を対象に実施した学習到達度調査（PISA）³の結果を踏まえて国が始めた教育改革に端を発する。市は、読書は

³ 学習到達度調査：2000年に最初の調査が行われ、以後3年ごとに調査が実施されている。調査内容のうち、読解力において、ドイツは加盟31カ国中、「総合読解力」が20位、「情報の取り出し」及び「解釈」が20位、「熟考・評価」が24位といずれも下位に位置し、読解力が不足していることが露見した。

子どもたちの学力向上に重要な役割を果たすとの考えから公共本棚を設置したが、この取組は「知識の共有」という文化も育んだ。家に閉じこもりがちな大人が外出するきっかけにもなり、街中に滞在する人が増えたという。

ii) ニッポン・コネクション

市民主体の小さな取組がまちの文化に大きく発展した事例がある。ニッポン・コネクションは、2000年からフランクフルト市で開催されている日本映画祭であり、1990年代後半にフランクフルト大学で映画学を専攻する2人の学生が、大学内で日本映画の上映会を企画したことを起源とする。当時、映画館やテレビで日本映画を観ることはほとんどできなかったが、彼らは日本文化に強い関心のある友人を巻き込みながら、市やケルン日本文化会館に掛け合うなど腐心して日本映画を入手し、2000年4月、第1回日本映画祭「ニッポン・コネクション」の開催にこぎつけた。

日本映画に興味の無い人にも足を運んでもらうため、彼らは上映に合わせてコンサートや講演会、展示会を開き、また書道や茶、着物、武道など日本文化の紹介・体験コーナーを併設した。このことが功を奏し、当初主催者が想定した1,500人をはるかに超える1万人が来場し、市内外の注目を集めた。

現在、ニッポン・コネクションは公益法人「Nippon Connection e.V.」によって運営されており、大学生、社会人などのボランティア約70人が所属している。一市民の熱心な活動から発展した映画祭の開催は19回を数えるが、今では映画を含む日本文化全般を発信し、さらに日本に関心のある人々を惹き付ける一大イベントに成長を遂げると同時に、出品した映画を手掛ける若手映画監督がその後の活動の幅を広げるきっかけになるケースもあるなど、映画祭としての評価も高まっている。

5 まとめ

今回の調査を通じて、ドイツにおける文化活動の根底には、住民の自主性に起因する活動意欲があり、地域に根差した小規模コミュニティでの活動が盛んであることも学んだ。

特に、エアランゲン市においては、中心市街地の再生の方法として、建造物の魅力を引き出したり、文化活動の機会を拡充することにより、様々な人やコンテンツを結びつけ、歴史的資源や文化活動をまちの魅力向上に繋げていく工夫が見られた。また、まちのあり方について住民と胸襟を開いて意見交換する場を設け、域内でどんな人がどんな思いで活動しているのかを常に理解することの大切さを改めて認識した。

そこで、視察先での取組を参考に、派遣元の古河市で実施すべき歴史的資源や文化活動を活用した地域活性化策を提案したい。

①文化遺産協会の設立による地域資源の積極的な活用

バイエルン文化遺産協会の取組を参考に、古河市においても、地域資源の維持・保全並びに効果的な活用による地域活性化を目的として文化遺産協会を設立することを提案する。協会員が市民を巻き込み地域資源の歴史的な価値や魅力を再発見するとともに、個人や団体から協賛金や地域資源の活用方法についてのアイデアなど有償・無償の協力を得て、これまであまり着目されてこなかった地域資源を積極的に活用していく必要がある。具体的には、未整備の古民家や武家屋敷を歴史・文化の発信拠点として開放し、古民家でのお茶会や武家屋敷での能楽の披露など、文化活動の体験スペースを設ける。こうした取組により、市民が楽しみながら地域の歴史を深く学び、地域に対する愛着の醸成に繋がっていくと考える。

②居心地の良い場所づくりと街歩きマップの作成

エアランゲン市での取組を参考に、日光街道や武家屋敷など古河市の昔ながらの街並みに一体感を持たせるため、施設の案内版やベンチなどに景観や雰囲気になじむ統一的な色やデザインを用いることを提案する。まちの景色に一体感を持たせ、歴史的文化的な趣を引き出すことで、市民が地域の歴史や文化を感じ興味を持つとともに、多くの人にとって居心地の良い場所になるのではないかと考える。

また、エアランゲン市における「遊び場オフィス」を参考に、市内の小学生を対象に街歩きをしてもらい、市内の寺社や史跡を訪ね、それらにまつわるエピソードを収集・反映した街歩きマップの作成を提案する。子どもたちが積極的に身近な歴史に触れ古河市の良さを再認識することで、まちに対する誇りが生まれ、まちの文化の発展や地域の活性化に繋がっていくのではないだろうか。

③公共本棚の設置とドイツ・コネクションの開催

フランクフルト市におけるオープンブックのような公共本棚を市内各所に設置することを提案する。公共本棚に市の歴史や文化に関する書籍を置くことで、市民の間で知識の共有を図るとともに、公共本棚が市民のコミュニケーションの場となり、新たな出会いや交流が生まれ市民活動へと発展することで、街に賑わいが生まれていくと考える。

また、フランクフルト市との国際友好交流都市の提携も視野に、フランクフルト市の「ニッポン・コネクション」と連携して、古河市でドイツの映画を上映するとともにドイツ文化を紹介する「ドイツ・コネクション」を開催することを提案する。両市が連携して互いの文化を理解することで交流が深まると同時に、自国の文化の大切さや素晴らしさを再認識することにも繋がる。

これらの取組により、地域の歴史や文化活動が身近なものになることで、市民の地域の

成り立ちやまちづくりに対する関心が高まり、ひいては地域愛の醸成に繋がっていくと考
える。地域の歴史や文化がまちの維持・発展に欠かせない大切な要素であることを市民が
認識し、地域で様々な活動を展開していくことを通して古河市の活性化が実現されていく
ことを期待したい。

6 おわりに

今回、海外調査研究事業という貴重な学びの機会を提供してくださった派遣元の古河市
と一般財団法人地域活性化センターに対して感謝を申し上げる。また、視察を快く受け入
れていただいたフランクフルト市の皆様、エアランゲン市の皆様、バイエルン文化遺産協
会の Judith Schlumberger-Steger 氏、そして、本調査において日程調整や細やかな気配り
で実りある視察にしてくださった通訳兼コーディネーターの永堀祐樹氏ほか、調査にご協
力いただいた全ての皆様に心からお礼を申し上げ、本報告書の結びとする。

【参考文献・資料】

- 高松平藏『ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか―質を高めるメカニズム』学
芸出版社、2016 年
- 村上敦『ドイツのコンパクトシティはなぜ成功するのか』学芸出版社、2017 年
- 内閣府ホームページ：<https://www.cao.go.jp/>
- 総務省ホームページ：<https://www.soumu.go.jp/>
- 厚生労働省ホームページ <https://www.mhlw.go.jp/index.html>
- 文部科学省ホームページ <https://www.mext.go.jp/>
- 文化庁ホームページ <https://www.bunka.go.jp/>
- 古河市ホームページ <https://www.city.ibaraki-koga.lg.jp/>
- バイエルン文化遺産協会ホームページ <https://www.kulturerbebayern.de/startseite.html>
- エアランゲン市ホームページ <https://www.erlangen.de/>
- フランクフルト市ホームページ <https://frankfurt.de/>